

論文

## 引揚げ—日本への移動：加害と被害の意識を中心に

'Hikiage'—The Movement to Japan :  
With a Focus on  
the Consciousness of Perpetrator and Victim

波田野 節子  
HATANO Setsuko

キーワード： 引揚げ、藤原てい、新田次郎、安部公房、小林勝、五木寛之、宮尾登美子

Key words : Hikiage, Fujiwara Tei, Nitta Jiro, Abe Kobo, Kobayashi Masaru, Itsuki Hiroyuki, Miyao Tomiko

本論文は2019年5月25日に青島の中国海洋大学で開催された海外韓国学の中核大学事業団2段階第5回国際学会において韓国語で行なった招請発表の内容を日本語にしたものである。

### 1 大日本帝国の崩壊と移動のはじまり

1945年8月、日本が敗戦すると大日本帝国とその占領地で人々の移動が始まった。海外にいた日本人は日本に、日本にいた植民地の人々は自分の故国に向かうのをはじめとして、帝国の各地でさまざまな方向への移動が始まった。翌年2月までに、156万人の朝鮮人、5万人の中国人、3万人の台湾人が日本を離れて故国に帰った<sup>1</sup>。満洲にいた朝鮮人のうち80万人が朝鮮半島に帰還し、130万人が残留/定着したとされる<sup>2</sup>。中国と日本から合わせて230万人以上の朝鮮人が朝鮮半島に帰還したわけである。朝鮮半島から大陸へ、大陸と東南アジアから台湾へ、南洋群島から沖縄へ、このほかにもあらゆる地域でさまざまな目的地に向かって移動が起き、同時に残留が発生した。

日本では、日本人が日本列島に向かった移動を「引揚げ」と呼ぶ<sup>3</sup>。1945年8月に日本人がいた大東亜共栄圏の地域は、朝鮮半島、台湾、南洋群島、満洲、中国大陸の占領地域、サハリン・クリル列島、東南ア・フィリピン・インドネシア、ニュージーランド、オーストラリアなど、広範囲にわたり、その数は兵士と民間人と合わせて約660万人だった<sup>4</sup>。そのうちの93パーセントが3年後の1948年末までに日本列島にもどった<sup>5</sup>。当時の日本の人口は約7100万人なので、人口の10パーセント近くが引揚げてきたことになる<sup>6</sup>。引揚げはそのあとも断続的に続いた<sup>7</sup>。

引揚げの進行状況は、はじまったばかりの冷戦体制の影響を受けた。アメリカが占領した朝鮮半島南部と南洋群島、そして中国国民政府に返還された台湾からの引揚げは順調に進んだが、ソ連に占領された満洲、朝鮮半島北部、サハリンでは移動が禁じられ、北朝鮮にいた人々はそこで冬を越さねばならなくなった。満洲から朝鮮半島を経由して日本に向かった人々もそこで足止めされ、一部は中国にもどって、翌年葫蘆島（中国にいた日本人を引揚げさせる米国船

が出た港)から帰国し、一部は朝鮮半島で越冬したあと歩いて38度線を越えた。ソ連の捕虜になってシベリアで強制労働をさせられた兵士たち、満洲のソ連国境近くにいた満蒙開拓団の人々、そして北韓で越冬した人々の中から少なくない犠牲が生じ、日本人が引揚げについて持つ記憶に大きな痕跡を残すことになった。

本稿では、敗戦後の引揚げ体験記と、引揚げを主題にした小説を年代順に見ていきながら、そこに現われた日本人の加害と被害の意識の変化について考えたい。

## 2 体験記にあらわれた「引揚げ」

1950年前後、引揚げを体験した人たちが書いた文章がたくさん刊行された。そこに生々しく描かれた凍死・餓死・強姦・集団自殺などは人々に衝撃を与え、引揚げの悲惨さが世間に知られることになった<sup>8</sup>。そして「引揚げ」は「原爆」と「空襲」で受けた戦争被害の記憶と結びつき、冷戦体制の下で近隣の関係国の人々から検証を受けることがないまま、被害者意識となって温存された。

成田龍一は「引揚げ」を歴史学の立場から分析した論文で、引揚げには植民者として現地に「出ていく」行動が先になければならないのに、引揚げを論ずるときには、その往還の「還」しか扱われないことが多いと指摘している<sup>9</sup>。成田はこの論文で、藤原てい(1918-2016)の体験記『流れる星は生きている』<sup>10</sup>を分析している。この体験記は1949年に出版されてベストセラーになり、その年のうちに映画化されて「引揚げ」についての日本人の記憶形成に大きな影響を与えた。

藤原は1943年に气象台勤務の夫について新京(長春)に行った。2年後に敗戦を迎えて南下する途中、北朝鮮の宣川で夫がソ連軍に連行され、3人の子供とその地で越冬して、夏に38度線を越えた。この作品には、家族のために生き延びようとする母親の必死の行動が描かれていて迫真力があるが、作者の視野は家族とまわり

の日本人集団に限定され、自分はなぜそこにいるのかという問いも、集団の外では何が起きているのかへの疑問も見られない。のちに藤原はこの作品を何度か改作し、また別途に引揚げの回想記も書いたが<sup>11</sup>、その意識はとくに変化しなかった。彼女がはじめて植民者であったことの自覚を文章化したのは、1986年に北朝鮮を訪問してからのことである<sup>12</sup>。この旅行で、彼女は現地の人々の当時の経験談を聞き、自分でも歴史の勉強をした。なによりも、この時期になると日本と近隣諸国との関係が深まり、日本人が被害意識だけを持つてはいられなくなったことも1つの理由だと思われる。

藤原が北朝鮮を訪問した1986年にアメリカで出版され、その20年後に日本と韓国で話題になった引揚げ体験記がある。母と姉と3人で北韓の羅南から引揚げたヨーコ・カワシマ(1933-)の『So Far from the Bamboo Grove』(Harper Collins)である。この本はアメリカで青少年優秀図書に指定されていたが、2006年に在米韓国人の父母がこの本を読み、指定をはずす運動を起こした。日本が韓国を植民地にしていたという前提が書かれていないこと、そして朝鮮人が日本女性をレイプする場面が青少年によくない影響を与えるというのがその理由である。このことが日本に伝わって話題になり、2012年に日本語翻訳が出た<sup>13</sup>。日本語版の「あとがき」でカワシマは、自分がこの本を書いたのは、辛かった体験を世に伝えて平和を願おうという意図からだったと書き、日本の加害性には言及していない。

作者の視点のみで書くことが可能な体験手記という様式は、主観的な記述になる危険性がある。日本では戦後、膨大な量の引揚げ体験記が書かれた。とくに80年代以降は「自分史」の出版が流行し、引揚げ経験のある多くの人たちが子孫に伝えるために記録を残した。それらは歴史資料として後世に残るであろうが、この危険性に留意することが必要である。

### 3 小説に現われた引揚げ

体験記も小説も、ともに創作であることには変わりがない。しかし自己を登場人物に反映させて外側と内側から客観的に描く小説には体験記と違った要素が入りこむ。

じつは藤原ていは体験記のまゝに小説を書いていた。帰国後に心身を病んだ彼女は、まず記憶をたどって日記を書いたけれどもそれに満足できず、次に小説を書いたが、それが「他人のこのよう」にしか見えないので、3度目に筆を執り、「自分を常に中心としてあの悲惨な生活の記録をたどった」という。それが『流れる星は生きている』である<sup>14</sup>。「他人のこのよう」に見えたというのは、実感がこもってない挿え物に見えたということであろう。こうした試行錯誤の結果、藤原は徹底的に「自分を中心として」書く体験記という様式を選びとったわけである。結局これが彼女の性格にあったのだろう。

『流れる星は生きている』が大人気を博したおかげで、小説も翌年『灰色の丘』と題して刊行されたが、こちらは注目されないうまま忘却された<sup>15</sup>。『灰色の丘』は、技巧は未熟だが、テーマとしては様々な可能性を秘めた作品だった<sup>16</sup>。しかし体験記と同様、加害の意識は見当たらない。

意外なことに、小説の才能を発揮したのは藤原ていの夫の方だった。彼は後日、新田次郎(1912-1980)という筆名で妻よりも有名な作家になる。宣川に妻と3人の子を残したままソ連軍により延吉に連行された新田は、そこで解放されて越冬した。このとき彼の命を救ったのは身につけていた無線技術だったが、皮肉にもこの技術のため、彼には中共軍と国府軍から強制的に留用される危険が付きまとった。凄惨な経験のすえに葫蘆島から引揚げた彼は、その時の経験を書こうとするたびに悪夢を見るため、『望郷』(1965)を書くまで20年もかかったという<sup>17</sup>。彼はもともと气象台勤務の技術者で、山岳を舞台にした小説を多く書いた。すでに直木

賞も受賞した中堅作家だった新田は、中共軍や朝鮮族の人々とのつきあいを通して日本の加害を書きこむと同時に、引揚者たちがソ連、中国、朝鮮の人々から受けた被害も冷静な筆致で描いている。

『望郷』が出てから4年後の1969年に芥川賞を受賞した清岡卓行(1922-2006)の「アカシアの大連」は自己陶酔の甚だしい小説である。清岡は満鉄本社の土木技師の息子として大連で生まれた。東京大学仏文科に進学したが、1945年の春、家族を心配して休学して大連にもどり、そこで敗戦を迎えた。大連には7月に日本内地から連れてこられたばかりの数千の少年工がいたほか、9月には満洲開拓村の難民が大挙してやってきた。生ける屍のような彼らの姿は大連の日本人市民に衝撃を与え、彼らを助けるための救援活動が起きたが、現地の日本人富裕層は資金援助に冷淡だったという<sup>18</sup>。清岡は、野球少年だったころの夢を壊すのがいやで難民救済基金募集の野球大会に行かなかったと「アカシアの大連」に書いている<sup>19</sup>。おそらく大連のこうした現実から目を反らしていたのだろう。売り食いができるものを多く持っていた彼の家は窮乏しなかった。引揚げ船が出たとき、家にはまだ値打ちのあるものが残っていたので大連にとどまり、ここで出会った日本女性と結婚して1948年に「引揚げ船での不思議な新婚旅行」をして帰国した。妻の死後、彼女を追慕して書いた「アカシアの大連」は、大連という都市に対するノスタルジーにあふれている。

フランス文学を専攻したこと、詩人であったこと、資産家の息子であったことなど、清岡は、台湾から引き揚げたあとも台湾への郷愁を書きつづけた西川満(1908-1999)と共通する点が多い。清岡の小説は文学的だが、彼の対大連に対する賛美はどこまでもロシアの植民者が造った芸術的な都市に向けての賛美であり、同じ空間のなかで抑圧されていた現地人の目には違って見えたかもしれないことへの想像力が欠如している。この小説が芥川賞を受賞できたのは、日本人の意識から帝国の植民者であったことへの

自覚がマヒしていた高度成長期の1960年代だったからであろう。中国との国交が回復して残留孤児の存在が明らかになり、「引揚げ」の悲惨さが日本人の脳裏に再浮上した1970年代以降には、この小説が芥川賞を取るのには難しかったと思われる。

植民者の加害の意識をもっとも早く、そして鮮明に表わした文学者は、奉天（瀋陽）からの引揚者、安部公房（1924－1993）である<sup>20</sup>。彼の父親は奉天にある満洲医科大学の研究者だった。中学卒業後に東京に行った安倍は、1943年に東京大学医学部に進学したころから創作を始める。1944年末に家族を心配して奉天にもどるが、敗戦の混乱のなかで父親を発疹チフスで失い、1946年秋に葫蘆島から引き揚げた。1948年、彼は満洲を舞台にした「終しり道の標べに」で登壇し、1951年に『壁』で芥川賞を受賞する。そして1954年に発表した「変形の記録」で正面から戦争加害の問題を扱った。この小説の主人公である兵士は将校たちとの関係では被害者であるが、集団虐殺された満洲の農民たちの前では加害者の一員として責任を持たされることになる。安倍は、自分たちが中国で「侵略移民」であり「植民地の支配民族」<sup>21</sup>であったという明確な加害の意識を持っていた。このころ書いたエッセイで安倍はこう書いている。

私の父は個人的には平和な市民であった。しかし日本人の全体は武装した侵略移民だった。たぶん、そのせいで、私たちは奉天を故郷と名乗る資格をもたないのだ<sup>22</sup>。

1957年に発表した「けものたちは故郷をめざす」の主人公で満洲から1人で引揚げようとする少年は、いつまでたっても日本にたどり着けない。おそらく日本にもどったあとも安倍はそんな感覚を持ちつづけたのだろう。「引揚げ」は安部公房の芸術の出発点であった。その後、彼は多くの小説を書く一方で、戯曲、演劇、映画で多彩な才能を發揮し、日本でもっともノーベル賞に近い作家といわれたが、1993年に急死

した。

晋州で農林学校の教師の息子として生まれた小林勝（1927－1971）は加害の意識に極度に敏感な作家だった。彼は大邱で小学校と中学校を終え、1944年、陸軍予科士官学校にいたときに敗戦を迎えた。のちに共産党員となり、1952年の朝鮮戦争反対闘争で火炎瓶を投げて現行犯として逮捕される。「朝鮮への負い目」がその行動の理由だったと、彼は長編『断層地帯』（1958）の主人公の口を借りて書いている。

ただ、彼は自分の行動を賭けるに足る充分の理由を自分自身の中に持っていた。復員してからずっと心の中に引きずって来た、日本人としての朝鮮への負い目、その負い目をかき消して行くためにとる一つの小さな、しかし多分に危険な行動——<sup>23</sup>

裁判闘争をしながら、彼は創作を始める。植民者であることに羞恥を感じた幼年時代の思い出を語る「フォード1927年」（1956）、尊敬していた新任教員がじつは朝鮮人だと知って侮辱して追いだす中学生たちを描いた「日本人中学校」（1957）、3・1運動で蜂起した民衆に恐怖するあまり無意識に猟銃を撃ち、植民者としての姿を露呈する在朝日本人を描いた「朝鮮・明治52年」（1969）など、43歳で死ぬまで彼は植民地朝鮮を舞台にした作品を書きつづけた<sup>24</sup>。彼が最後に書いたエッセイのタイトル「「懐しい」と言ってはならぬ」（1971）は、朝鮮と朝鮮人に対する安易なノスタルジーを自らに禁じる言葉であった<sup>25</sup>。

1972年、日本と中国の国交が回復する。その前年に朝日新聞に連載された本多勝一（1932－）のルポルタージュ『中国の旅』は、日本人が中国で行なった蛮行を明らかにして、戦争被害者の意識に閉じこもっていた日本人読者に衝撃を与えた。同じ年の8月、月刊誌『潮』は「日本人の侵略と引揚げ体験」という特集を組んだ。標題が示すように、ここには引揚げという悲劇の原因は自国が犯した侵略であるという加

害の意識が前面に出ている。これは、アメリカのベトナム戦争への協力は加害行為であるという当時の反戦運動の主張と連動していた。

このころから少年期に引揚げを体験した作家たちの活躍が目につくようになり、『文学界』は1975年の4月号に「異邦人感覚と文学」というタイトルで、平壤から引揚げた五木寛之(1932-)とソウルから引き揚げた日野啓三(1929-2002)の対談を載せた。この対談で五木は、植民地で育った自分が日本の風土の中で抱くことになった違和感について語り、自分と同じく植民者の子だった作家アルベール・カミュは、アルジェリアとフランスの両方から拒絶された感覚を持ったに違いないとして、カミュの代表作「異邦人」を「引揚げ文学」と呼んだ。

五木の直木賞受賞作「蒼ざめた馬を見よ」(1967)は、あるジャーナリストが冷戦の陰謀に巻きこまれて知らぬまに西側の組織に利用される話であるが、この小説には、筋とはまったく関わりなく、フラッシュバックのように作者の平壤での経験が挿入されている。このころ五木は、「体験を直接書かなくても、私たちの書くものどこかに、その後遺症が影のようにひそんでいる。(中略)引揚げを素材とした作品をひとつも書かなくても、すべての作品にその体験が内在する」<sup>26</sup>と書いたが、彼が「その体験」を回想の形によって文章化することができたのは、体験からじつに57年後の2002年で、彼は70歳になっていた<sup>27</sup>。

月刊誌『諸君』は1979年7月号に、「日本の“カミュ”たち—「引揚げ体験」から作家は生まれた」というタイトルで、五木と日野をはじめ少年期に引揚げ体験をした16人の表現者のインタビュー記事を掲載した<sup>28</sup>。これを企画した京城生まれの評論家、本田靖春(1933-2004)は、こう書いている。

日本人であって日本人でない。そういう感じは、日本育ちの日本人には、理解がつかないだろう。気がつくと、私は自分を外側に置いて「日本人」を眺めている。その目は外国人のそ

れではないのだが、自分がこの国の人たちと、かなり異質だという認識を捨てることができない<sup>29</sup>。

「引揚げ派作家と呼ばれる人たち」が書くものには「共通のにおい」<sup>30</sup>があると本田は言う。彼のインタビューから浮かびあがった共通点とは、「集団への適応不全」、「よそ者」意識、そして生まれ故郷を喪失したという感覚と同時に、加害者たる自分には故郷を懐かしむ権利はないと考えている点であった。

1980年代になると中国や韓国をはじめとするアジア諸国が経済発展を背景に発言権を強め、日本人が被害者意識に閉じこもっていることを許さなくなった。小説もその風潮を反映する。

吉林の満鉄社宅に住んでいた澤地久枝(1930-)は14歳で敗戦を迎えた。なぜ神風が吹かないのか不思議に思ったほどの軍国少女は<sup>31</sup>、このあと強姦の恐怖に怯えねばならなかった。そのころの彼女は戦争の責任をとって天皇は罰せられると思っていたという。満蒙開拓団の少年たちの悲惨な姿を見たときは、彼らに青少年義勇軍に入るよう勧めた「開拓の父」加藤完治は責任をとって自決しただろうと考えた。しかし天皇も加藤完治も責任を取っていなかった<sup>32</sup>。

のちにノンフィクション作家になった澤地は、1982年に『もうひとつの満洲』を書き、日本人が「土匪」とか「共産匪」と呼んでいたゲリラ楊靖宇(1905-1940)をフォーカスすることで、当時満洲に住んでいた日本人たちに見えていなかった反満抗日運動を明示化した。「あとがき」で彼女は、「敗戦の一年後に日本へ帰り、祖国の暮らしに違和感をいだきつづけていた自己」を誇りに思うとして、「反満抗日闘争と、戦士たちの存在」を描くことで満洲に対する郷愁を確認したと書いた<sup>33</sup>。

すでに中堅作家だった宮尾登美子(1926-2014)は、1985年に自分の引揚げ経験を小説化した長編『朱夏』を発表した。1945年4月、乳飲み子を抱いた18歳の母親綾子が、高知県の農村を出て満蒙開拓団の学校教員の妻として満洲

の飲馬河に行ってから、翌年9月に故郷にもどるまでの1年半の経験を描いた『朱夏』は、宮尾自身の成長小説でもある。わがままで贅沢で世間のことに暗かった綾子は、敗戦後の過酷な体験のなかでさまざまなことに目を開いていく。開拓団の周囲の村人たちから襲われる不安のなかで、綾子は新京駅で見たある光景を思いだす。満洲人が警官に殴られて鼻血を流し、日本語で「我々が白米を食べたらどうして罪になるのか」と叫んでいた光景である。米は日本人だけに配給され、満人には高粱とうもろこし、白系ロシア人には小麦粉と決められていたが、そのときの綾子は当然だと思っていたのだった。満洲に来てからの自分の行動を思い起こしながら、綾子は自分たちがこの地で抑圧者だったことに気づいていく<sup>34</sup>。

1990年代、冷戦が終結してグローバリゼーションの時代が到来した。人々の接触が直接的、またネット等によって間接的に頻繁になると、日本人は自分たちがもつ過去の記憶と近隣諸国の人々がもつそれとが違うという事実と直面した。戦後、アメリカ中心の冷戦体制のなかで、近隣諸国が国内事情に追われて日本との責任を追求しなかったあいだに日本人は過去を忘却し、引揚げ体験を創作の原点とする作家たちはそんな日本人に対して「異邦人」のように違和感を持ちつづけてきた。だが、この1990年代、彼らはすでに「引揚げ」の作品化をそれなりに終えて退場を始めた。世紀が変わり、彼らの世代の本格的な退場とともに、いま「引揚げ文学」は最後の時を迎えつつある。

#### 4. おわりに代えて— 研究対象としての「引揚げ」

体験記と小説の創作は引揚げ世代の消滅とともに終わろうとしているが、引揚げに関する研究はそうではない。社会科学の分野では冷戦体制が崩れて資料が解禁され、また引揚げ研究が「反共」と見なされることもなくなって研究環境が良くなり、むしろ研究が活性化している。

たとえば引揚げ事業の迅速さが、中国の国共内戦と米ソ冷戦という国際政治と密接な関係にあったことを明らかにした加藤陽子や加藤聖文の研究<sup>35</sup>、加害者であると同時に被害者であったはずの「植民者/引揚げ体験者」が被害者としてのみ記憶され、公的な記憶体系に編入されていく過程を解明した浅野豊美の研究<sup>36</sup>、そして引揚者および残留者である在日朝鮮人が、戦後の日本社会に包摂/排除される様相と、中国からの帰国者と在日朝鮮人の支援運動が多文化共生へと展開していく過程を考察した蘭信三の国際社会学からのアプローチ<sup>37</sup>など、新しい視点による研究が活発におこなわれている。

文学の領域では朴裕河の『引揚げ文学論序説』<sup>38</sup>のほか、坂堅太の安部公房研究<sup>39</sup>、原佑介の小林勝研究<sup>40</sup>、和泉司の西川満研究<sup>41</sup>など、若い研究者の活躍が目立つ。現在「引揚げ文学」は日本文学の傍流にとどまっているが、これからは他の学問領域とも関わりながら研究対象としての重要性が高まっていくと思われる。とりわけ必要なのは隣接する地域の「移動文学」との比較である。大日本帝国が崩壊したあとに同じ場所で同じ時に起こっていたことが異なる視点と異なる言葉で小説化されている。韓国には廉想渉、安懐南、許俊などの「帰還小説」があるが、そうした作品と「引揚げ文学」との比較は重要な作業である。

少年時代に引揚げを体験した世代は、戦後の日本に対してアウトサイダーの感覚をもった。一方、韓国と台湾で少年期に皇民化教育を受けて日本語を血肉化させた世代は、解放後に韓国語と中国語への「帰還」を強制された。彼らは空間でなく言葉の「移動」をせまられたわけである。彼らにも、そのあとアウトサイダーの感覚に苦しんだ痕跡が残っている。こうしたことを総合的に照らし合わせて分析することにより、日本帝国の崩壊が引き起こしたのが何であり、その後どのように展開し、どのような形で現在まで影を引きずっているのかを明らかにすることが必要である。

謝 辞

本論文はJSPS科研費16K02605の助成を受けている。

- 1 厚生省編『引揚げと援護三十年の歩み』、ぎょうせい、1978、151頁
- 2 田中隆一「朝鮮人の満洲移住」蘭信三編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版、2008、185頁
- 3 公式には軍人・軍属の移動は「復員」、民間人の移動は「引揚げ」だが、一括して「引揚げ」と呼ぶこともある。本稿では一括して「引揚げ」とする。
- 4 『引揚げと援護三十年の歩み』、20頁
- 5 『引揚げと援護三十年の歩み』、689頁の表により計算
- 6 ちなみにドイツ敗戦後のドイツへの引揚げ者の数は1年5ヵ月で1350万人に上るといふ。若槻泰雄『戦後引揚げの記録』時事通信社、1991、359頁
- 7 国民政府の敗北により引揚げ事業はいったん中断した。1953年から始まった後期集団引揚げについては大澤武司の論考「[「ヒト」の移動と国家の論理—後期集団引揚の本質と限界』（『1945年の歴史認識』東京大学出版会、2009）参照。残留孤児の引揚げが始まるのは日中国交正常化のあとである。
- 8 たとえば、富士書苑編『秘録大東亜戦史』全12巻、富士書苑、1953；森文子『脱出行』1948、開題社（1983国書刊行会再刊）など。個人的な話であるが、筆者は家にあった『秘録大東亜戦史』を子供のころ読み、集団自決の描写に衝撃を受けて長いあいだ「引揚げ恐怖症」だった。
- 9 成田龍一「[「引揚げ」に関する序章]『思想』No.955、2003.11、150頁
- 10 藤原てい『流れる星は生きている』、日比谷出版社、1949
- 11 藤原てい『旅路』読売新聞社、1981
- 12 「日本の長い圧政の時代のうらみも北朝鮮の人たちの心に深く残っているにちがいない」と書いている。「北朝鮮紀行一流れる星の跡を訪ねて」『家族』読売新聞社、1987年、96頁
- 13 『竹林はるか遠く—日本人少女ヨーコの戦争体験記』ハート出版、2013
- 14 「あとがき」『流れる星は生きている』日比谷出版社、1949、316-317頁
- 15 藤原てい『灰色の丘』宝文出版社、1950。表題作の中編「灰色の丘」のほか「襤褸」「三十八度線の夜」「着物」の3つの短編が収録されている。「灰色の丘」は保安隊の男たちとのつきあいで傷つき発狂して自殺する女性、「襤褸」は引揚げ船のなかでオムツを盗む女性、「三十八度線の夜」は保安隊を脱走する男とともに三十八度線を越える女性、

「着物」は夫でなく戦死した恋人のために思い出の着物を手離さない女性をそれぞれ主人公にしている。序にある詩によれば、主人公たちは三十八度線の向こうにいたときに作者が見た女性たちの「哀しい群像」である。ただし「襤褸」だけは作者自身をモデルにしている。

- 16 短編集『灰色の丘』については以下の論文がある。成田龍一「忘れられた小説『灰色の丘』のこと」中野敏男ほか編著『継続する植民地主義』青弓社、2005、213-223頁/金艾琳「縦断した者、横断したテクスト—藤原ていの引揚げ叙事、その生産と受容の精神誌」榊赫泰・車承祺編『<戦後>の誕生—戦後日本と「朝鮮」の境界』新泉社、2017/末益智広「藤原てい『流れる星は生きている』『灰色の丘』をめぐる「引揚げ」の記憶」、千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書330、2018、20-44頁
- 17 新田次郎『望郷』新潮文庫、1977、267頁
- 18 石堂清倫『大連の日本人引揚げの記録』青木書店、1997、23-25、63-70頁
- 19 清岡卓行『アカシアの大連』講談社文芸文庫、1988、155頁
- 20 この問題については坂堅太の『安部公房と「日本」植民地/占領経験とナショナリズム』（和泉書院2016）の第2章「主観的被害者か、客観的加害者か」を参照のこと。
- 21 安部公房「瀋陽十七年」『安部公房全集4』1997、87頁（初出は『旅』1954年2月号）
- 22 安部公房「奉天—あの山あの川」『安部公房全集4』新潮社、1997、484頁（初出は『日本経済新聞』1955.1.6）
- 23 『断層地帯』『小林勝作品集2』白川書院、1975、47頁
- 24 「フォード1927年」と「日本人中学校」は上記作品集1に、「朝鮮・明治52年」は5に入っている。なお、1927年は作者が生まれた年で、明治52年は3.1運動が起きた1919年の明治元号表記である。
- 25 小林勝「懐しい」と言ってはならぬ『朝鮮文学』11号、新興書房、1971、21-25頁
- 26 五木寛之「長い旅への始まり—外地引揚げ者の発想」『毎日新聞』1969年1月22日付
- 27 五木寛之「五十七年目の夏に」『運命の足音』幻冬舎、2002
- 28 インタビューを受けたのは、五木と日野のほかに、作家の後藤明生、澤地久枝、三木卓、大藪春彦、生島治郎、詩人の天沢退二郎、版画家の池田満寿夫、評論家の尾崎秀樹、映画監督の山田洋二、藤田敏八、劇作家の別役実、山崎正和、漫画家の赤塚不二夫、英文学者の小田島雄志である。
- 29 『諸君』1979年7月号、199頁
- 30 同上、200頁
- 31 澤地久枝『14歳<フォーティーン>』集英社新書、2015、11頁。タイトルには「満洲開拓村からの帰還」とあるが、主人公がいたのは開拓村ではなく吉林である。
- 32 同上、164頁。加藤完治（1884—1967）は、のちに

- 教育家として復帰した。
- 33 澤地久枝『もうひとつの満洲』文春文庫、1986、281-282頁
  - 34 宮尾登美子『朱夏』新潮文庫、2000、261頁
  - 35 加藤陽子「敗者の帰還—中国からの復員・引揚げ問題の展開—」『国際政治』No.109、1995；加藤聖文「日本帝国の崩壊と残留日本人引揚げ問題」増田弘編著『大日本帝国の崩壊と引揚げ・復員』慶應義塾大学出版会、2012
  - 36 浅野豊美「折りたたまれた帝国—戦後日本における「引揚げ」の記憶と戦後的価値—」『記憶としてのパールハーバー』ミネルヴァ書房、2004
  - 37 蘭信三「戦後日本をめぐるポストコロニアルなひとの移動と「多文化共生」」『移民研究と多文化共生』お茶の水書房、2011
  - 38 朴裕河『引揚げ文学論序説』人文書院、2016
  - 39 坂堅太『安部公房と「日本」—植民地／占領経験とナショナリズム』和泉書院、2016
  - 40 原佑介『禁じられた郷愁—小林勝の戦後文学と朝鮮』新幹社、2019
  - 41 和泉司「引揚げ後の植民地文学—1940年代後半の西川満を中心に」『藝文研究』vol.94、慶應義塾大学藝文学会、2008、63-81